

都道府県別賞一等

一枚の写真

宮崎県 鵬翔中学校 一学年

井手 大雅

鯉のぼりなびく五月の写真に写る僕は、串間の祖母に抱かれていた。何度見ても、その時の記憶は全く無い。でも僕は、とても愛されていたし、きっと祖母にとつても、かけがえのない時間だったと思う。

僕の祖母が、病に倒れたのは、僕が産まれて八カ月経った頃だったそうだ。脳梗塞で倒れ、そのまま、話すこともできずに約八年間病室で寝たきりのまま、僕をもう一度抱いてくれることも無く、亡くなってしまった。

僕達家族は、家に一人きりになった祖父も心配だったし、祖母が突然目を開けてくれる気がしたり、僕は僕の声にはきっと反応してくれると幼いながらに思っていたので、月に一度は必ず病院を訪れていた。

祖母が入院していた病院は、施設と一体化しており、医療器具が整っていて、病室のあちらこちらに注意書きがあったのを覚えている。意識のない祖母に対し声かけをしながら床ずれをしないように、一日に何度も体を左右に傾けてくれるヘルパーさんや介護士さん。病室の注意書きを確認して、祖母に優しく寄り添ってくれていた。点滴を変える時、息が浅くなっていた時、常に看護師さんが様子を見ながら、医師に相談し、不安で仕方がない僕達のことでもケアしてくれた。意思疎通のできない祖母の周りには、生命保険の一時金によって自由無く入院し、安定した医療が受けられる環境があった。また、国が設ける公的医療保険により、自己負担額が抑えられ、最期に息を引き取るまで手厚い対応してもらえたのだろうと思った。

保険とは何なのか正直分からなかった。保険の種類によって両親が多くのお金を、生命保険会社に支払っていることに対して何も考えたことは無かった。でも、祖母が祖父と生前に生命保険に入っていたことにより、命を保てたのは、このおかげだったと今改めて思う。

祖母が亡くなり、葬儀の時に沢山の人達に囲まれて、僕は幼かったが綺麗な花が所狭しと並んだ暖かい雰囲気だったことを覚えている。祖父は普段、自分の思ったことを全て口には出さないが、火葬場でお別れをする時に、初めて僕達の前で祖母の名前を呼び、

「ありがとう。」

と大きな声で言った。父も母も僕も弟も泣きくずれたし、祖母の終わりは悲しかったけれど、生命保険や公的医療保障制度は人が生きる上で本当に大切なも

第60回中学生作文コンクール

のだと実感した。
祖母を思い出しながら、あの写真を見る。なんだか沢山話せた気がした。